編集後記

日本人のノーベル賞ダブル受賞を除けば2002年度もとりわけ明るいニュースなしに終わりそうである。というよりも血なまぐさい雰囲気が絶えないことが日常的になってしまった。ごく最近のスペースシャトルの爆発事故も悲惨である。犠牲者と遺族にとっては大変な年明けになってしまった。宇宙開発を含めた巨大科学にはどうも馴染めない。「等身大の科学技術」がもっと前面に出てほしいと痛感するこのごろである。(K. S.)

編集委員というこれまでとは違った立場で『女性学評論』に関わらせて頂き、改めて、女性学インスティチュートが多彩な分野の方々の御研鑽によって支えられていることを実感し、大いに触発される機会となりました。(M. K.)

よく言われることだが、おとことおんな、こころとからだ、正義と悪、等々、単純な二分思考は、見通しをよくするという利点がある反面、多様な側面を見逃して思考が硬直するという問題も孕んでいる。ナイーヴな非寛容さがつきまとっているときには尚更だ。今回の特集も、そういった二分思考を越えたところにある豊饒さを改めて浮き彫りにできればと願っている。それにしても、U 先生の「性格の悪い論考」を掲載できなかったのは残念。(M. K.)

編集委員を引き受けたのは軽い気持ちからだったのだけれど、その後あれよあれよという間に編集会議に呼びだされ、原稿を依頼され、とうとう編集後記まで書く羽目になり、それはちょっと苦しかったという思いがする一方で、他方で自分の幅が広がった気がすると同時にまだまだ狭いことが自覚できてとてもよかったと思っている。(T. M.)

「編集後記」には、何を書いたとしても、過ぎ去ろうとするこの一年への思いが込められるのでしょうが、2002年が私の一生にとってどんな意味を持っていたのかと考えると、「あたふたと流された」としか感じられません。それなりの覚醒もあったのですが、引退した「貴乃花」の堂々とした回顧を思うと、私は賛嘆しつつ呆然です。しかし『女性学評論』は、元気にできあがりました。(U. T.)